原著論文

ハンドボールの速攻に関する研究

河村レイ子，大西　武三，水上　一

A Study of Fast Break in Handball

Reiko Kawamura, Takezo Ohnishi and Hajime Mizukami

Abstract

The purpose of this study was to make clear the frequency and the factors of success of fast break in handball by means of analysing women's handball 20 games.

Obtained results were as follow;

1. The rate of fast break was 14.8 percent of the total attack opportunities and the rate of success of the total fast break was 73.8 percent.
2. In winning sides, the rate of fast break was 21.8 percent of the total attack opportunities and in loosing side, it was 7.7 percent.
3. The rate of success of fast break was high when attackes were commende from handling mistakes (78.9 percent) and interceptions (76.1 percent).
4. The rate of success of fast break was also high when a shoot was released quickly after a small number of passes.

1．緒　言

ハンドボール競技における攻撃の方法を大別すると速攻と遅攻とに分けることができる。イオン・クンスト[1]は，「速攻は相手チームがボールを失った結果としての１人または複数のプレイヤーの防御から攻撃への急激な移行をさす」と述べている。速攻は相手防御陣の防御システムが整わないうちに攻めこむわけであるので，短時間で得点をあげることができ有効な攻撃手段であると考えられる。

前述のイオン・クンスト[2]は速攻を成功させるための技術要素を次のように述べている。

1．ゴールキーパーによるボールの確保
2．速いスタート
3．疾走
4．ボールのクリアーまたはパス
5．後方から来るボールのキャッチ
6．ドリブリング
7．シュート

２～３人での速攻になるとこれに斜め前方へのパスが加わる。

これらのすべての技術が速攻のチャンスを最大限に生かすための重要な要因となる。

本研究では女子のハンドボールゲームの中でどれ位の回数で速攻が出現しているのかを

明確にしながら，速攻を成功させるための要因が何であるのか，またゲームにおける速攻の重要性を明らかにしていきたいと考えている。

2．研究の方法

(1) 研究の対象

昭和59年度関東女子学生ハンドボール春季リーグ戦より9試合，昭和59年度東日本女子学生ハンドボール選手権大会より4試合，昭和59年度関東女子学生ハンドボール秋季リーグ戦より7試合を選び研究の対象とした。

(2) 研究の方法

全20試合をコート上方よりビデオテープに録画し，後日再生分析した。ランニングスコア，ボール獲得の原因，速攻の開始から終了までのプレイヤーの動きとボールの動き等を中心に，記録用紙にまとめた。

また以下の方法で記録の整理を行った。ランニングスコアからはチーム毎の攻撃回数，攻撃成功回数，攻撃成功率，速攻回数，速攻成功回数，速攻成功率，遅攻回数，遅攻成功回数，遅攻成功率を記録した。ボール獲得の原因はシュートミスにより相手ボールとなったもの，パスミスやキャッチミスなどのボール保持ミスによるもの，オーバーステップ・チャージング・ラインクロスなどの反則や違反によるものに区別して整理した。速攻時のプレイヤーの動き，パスコース等は私案の記録用紙に記録した。

3．研究の結果と考察

(1) 攻撃の方法

攻撃活動がどのように展開されているのかを具体的に探るため，全攻撃回数，速攻の攻撃回数，遅攻の攻撃回数，またそれぞれの攻撃成功回数等を表1に表わしてみた。

全20試合中，両チーム合わせての攻撃回数は2533回であった。そのうち速攻は374回で攻撃全体の14.8％を占め，遅攻は2159回で攻撃全体の85.2％を占めており，速攻の率が低いのが目立った。

しかし攻撃成功率は遅攻の26.1％に比べると速攻は73.8％と高率であった。また速攻による得点が全得点に占める割合は32.9％と約3分の1であった。

1チーム1試合当りの得点は速攻で6.9点，遅攻で14.1点，合わせて21点であった。

(2) ボール獲得の原因別速攻成功率

イオン・クンスト[3] は速攻を開始する最も好ましい状況を次のように述べている。

1．防御チームの1人のプレイヤーによるボールのインターセプト
2．相手の行ったシュートに対するゴールキーパーの捕球，ボールのはじき，または迅速にボール保持に入るプレー
3．結果としてそのときまで防御にあったチームのボール保持であることが審判によって判定された技術ミスや規則違反（オーバーステップ，ダブルドリブル，チャージング，ラインクロスなど）

表1　攻撃の方法と成功率

	攻撃回数	1試合当り攻撃回数	全体に占める割合	攻撃・成功回数	1試合当り攻撃成功回数	全体に占める割合	攻撃成功率
全体	2,533回	63.3回		839回	21回		33.1％
速攻	374回	9.4回	14.8％	276回	6.9回	32.9％	73.8％
遅攻	2,159回	53.9回	85.2％	563回	14.1回	67.1％	26.1％

表2　ボール獲得の原因と原因別速攻成功率

	総　数	全体に占める割合	成功数	全体に占める割合	失敗数	攻撃成功率
シュートミス	126回	33.7%	86回	31.2%	40回	68.3%
インターセプト	88回	23.5%	67回	24.3%	21回	76.1%
ボール操作ミス	95回	25.4%	75回	27.2%	20回	78.9%
規則違反	65回	17.4%	48回	17.4%	17回	73.8%
全体合計	374回		276回		98回	73.8%

ここでは防御から攻撃に移るキッカケを，攻撃チームのシュートミスによるもの，攻撃チームのボール保持ミスや規則違反によるもの，防御チームのインターセプトによるものとに分けてみた。表2はボール獲得の原因と原因別速攻成功率をまとめたものである。

まず一番多かったのは攻撃チームのシュートミスからボールを獲得し速攻に出るもので，126回あり全体の33.7%を占めていた。ボール操作ミス，インターセプト，規則違反の順であった。

攻撃成功率からみるとボール操作ミスからが78.9%と最も高く，インターセプトから76.1%，規則違反から73.8%と平均の73.8%を上回っており，シュートミスからの速攻の成功率は68.3%と平均からはやや劣るものの，遅攻の成功率と比較するとこれも高い値を示しており，速攻が有効な攻撃方法であることが説明できる。防御力を強化することによって，パスカットをねらったり，相手にミスをさせる等の速攻を開始する好ましい状況を積極的につくり出すようにすることが必要となる。

(3) 速攻にかかわった人数からみた攻撃成功率

味方の防御力や相手のミスによりようやく速攻のチャンスを得ても，速攻の攻撃途中でのパスミスやキャッチミスがあっては，シュートチャンスを得ることはできない。速攻の攻撃ではできる限りパスの回数を少くし短時間のうちにシュートにつなげることが，ミスを少くすることにつながると予想される。

速攻にかかわった人数と攻撃成功率を表3にあらわした。

各人数での速攻の内容について代表的な例を説明してみよう。

1人；インターセプトやシュートブロックからフィールドプレイヤーが単独でドリブルを使用してボールを運びシュートをする。

2人；ゴールキーパーによるシュート阻止や，フィールドプレイヤーによるインターセプト，また攻撃チームの規則違反等をキッカケにして，先を走る1人のフィールドプレイヤーへパスを送りシュートをする。

3人；ゴールキーパーによるシュート阻止や，フィールドプレイヤーによるインターセプト，また攻撃チームの規則違反等をキッカケにして，先を走る2人のフィールドプレイヤーが，パスやドリブルでボールを運びシュートをする。

また代表的な速攻での攻撃パターンを図1，図2に参考までにあげてみた。

表3の結果からわかるように，1人での速攻が84.2%と成功率が一番高く，速攻にかかわる人数が増える毎に成功率は低くなっていき，5人の速攻では成功率が50%となる。な

表3　速攻参加人数と人数別攻撃成功率

	1　人	2　人	3人人	4　人	5　人	合　計
攻　撃　回　数	38回	109回	140回	73回	14回	374回
攻撃成功回数	32回	89回	101回	47回	7回	276回
攻　撃　成　功　率	84.2%	81.7%	72.1%	64.4%	50%	73.8%

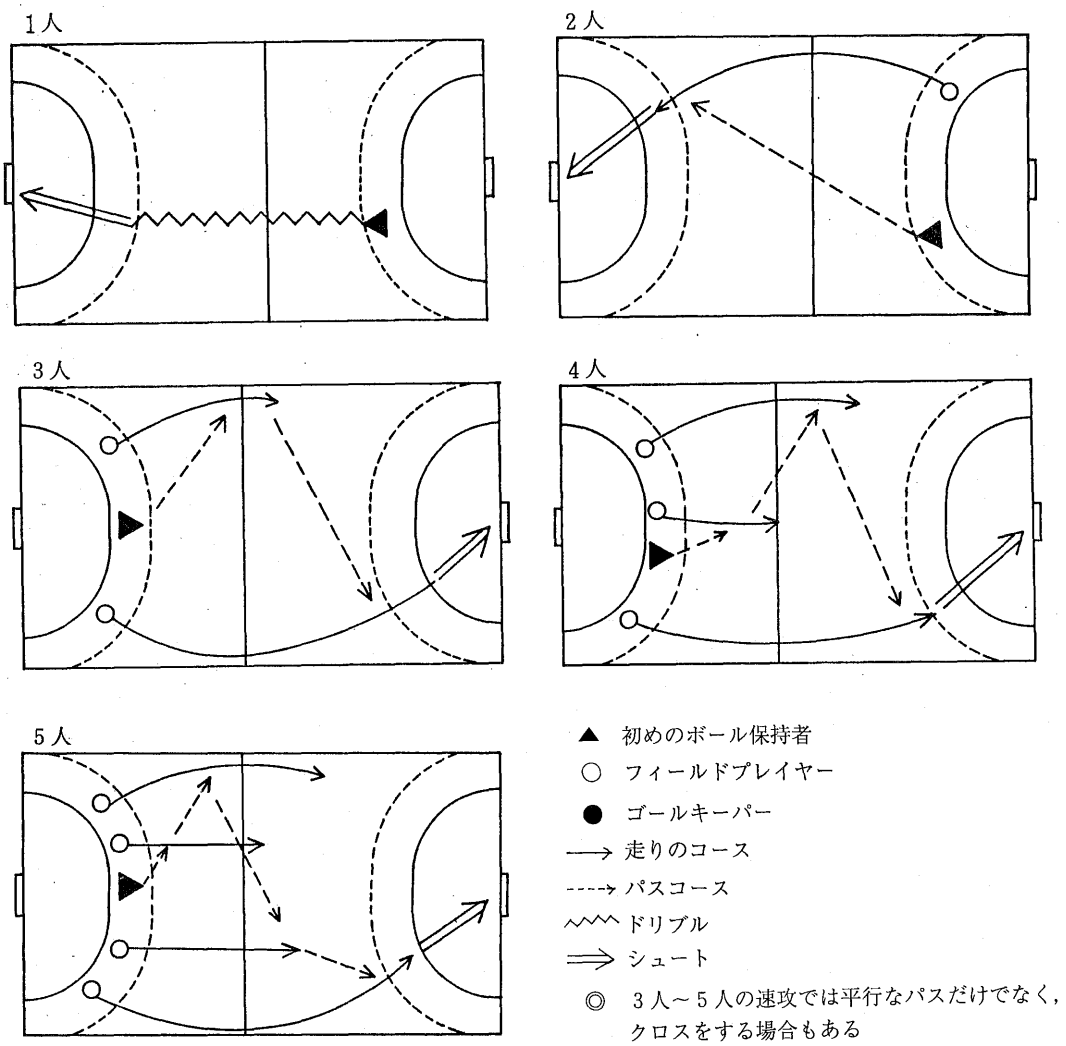

図1　基本的な攻撃パターン
—フィールドプレイヤーから速攻が開始する場合—

かでも２人～３人による速攻の頻度が高く合わせると66.6％と全体の３分の２を占めており，攻撃成功率も76.3％と高い。

(4) 勝敗別にみた速攻成功率

全20試合中勝チーム，負チーム別の攻撃活動をあらわしたものが表４である。勝チームの１試合当りの平均得点は26.9点，負チームは15点であった。

勝チーム負チーム別に全攻撃回数に対する速攻の割合をみていくと，勝チーム21.8％，負チーム7.7％と勝チームの方が３倍ほど速攻を多く行なっていることになる。速攻による攻撃成功率は負チームの場合でも63.9％と比較的高く，遅攻による攻撃成功率の20.4％と比べると約３倍の成功率となる。ここでも速攻が攻撃の有効な手段であることが考えられる。特に得点力のない負チームの場合は，防御力の強化をはかり速攻にむすびつけるチャンスをより多く作り出すことが出来れば，得点は増すものと考えられる。

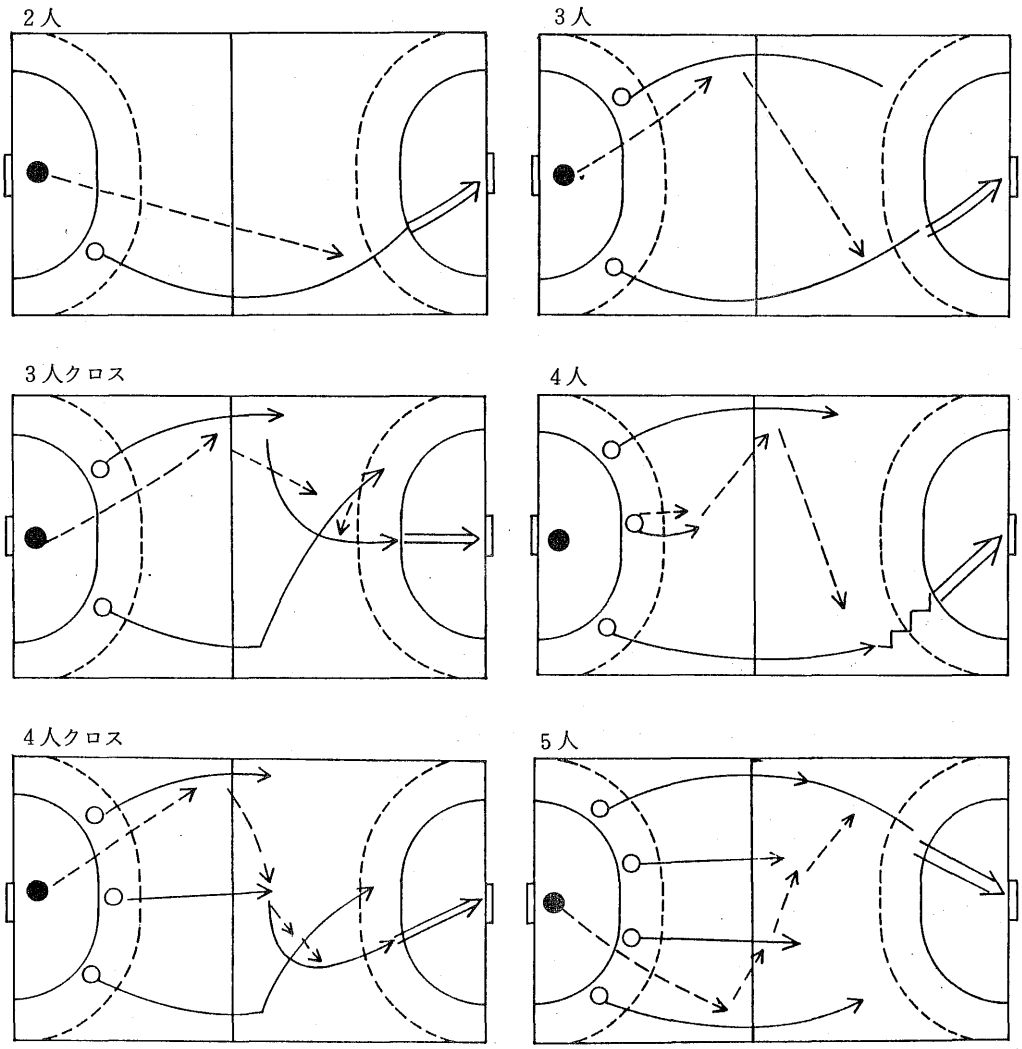

図２　基本的な攻撃パターン
—ゴールキーパーから速攻が開始する場合—

表4　勝チーム負チーム別の攻撃内容

	攻撃回数	攻撃成功回数	攻撃成功率	速攻回数	速攻成功回数	速攻成功率	遅攻回数	遅攻成功回数	遅攻成功率	速攻/全体
勝チーム	1269	539	42.5%	277	214	77.3%	992	325	32.8%	21.8%
負チーム	1264	300	23.7%	97	62	63.9%	1167	238	20.4%	7.7%

表5　得点差と速攻の出現率

得点差	0～4	5～9	10～14	15～19	20～24	25～29	全試合
試合数	2	7	5	3	1	2	20
勝チームの速攻出現率%	16.8	18.8	21.7	26.2	18.8	33.6	21.8
速攻成功率%	84.2	69.9	73.5	74.5	42.9	88.9	77.3
負チームの速攻出現率%	10.2	9.6	8.7	1.0	11.5	4.5	7.7
速攻成功率%	66.7	69.0	64.3	50.0	42.9	50.0	63.9

(5) 試合の得点差からみた速攻成功率

現在大学女子ハンドボール試合は30分ハーフで試合が行われている。一試合平均の攻撃回数は1チーム63.3回となり，両チーム合わせると126.6回となっている。攻撃成功率が33.1%であるので，両チーム合わせて1試合当り41.9点の得点があげられていることになる。技術戦術に優るチームはより速攻に出やすい状況でボールを相手から奪ったのち，攻撃の第一局面である速攻からのシュートチャンスを得ることが多い。技術戦術が劣るチームでは防御力が未熟なため相手に簡単に点をとられたり，速攻を成功させるのに最も好ましい状況で相手からボールを奪うことができなかったり，また速攻のチャンスが生じても速攻を成功させる技術力に欠け，相手防御陣の帰陣にあいやむを得ず第二局面である遅攻へ移行するといった具合であろう。

得点差と速攻との関係を表5にあらわした。これによると得点差5～9点の試合が7試合と多く，次に10～14点差の試合が5試合と多かった。得点差が25～29点と大きい試合では，速攻出現率が勝チーム33.6%，負チーム4.5%と大きな差がみられた。また勝チームの速攻成功率は88.9%と非常に高く，速攻による得点が多かったことを示す。反対に得点差が0～4と小さな試合では，勝チーム16.8%，負チーム10.2%と差がわずかであった。勝チームの速攻成功率は84.2%と高かった。得点差が接近している場合には，確実なチャンスにしか速攻を行わず速攻の出現率は低いが，その少ないチャンスには必ず得点しているのではないかと考えられる。

速攻の成功による大量得点は自チームの士気に大いに影響を与え，相手チームには心理的に悪影響を与えることになる。

4．まとめ

結果と考察より以下のような結論が得られた。

1．速攻による攻撃の割合は全体の14.8%と低かった。しかし速攻の攻撃成功率は73.8%と高く，速攻は攻撃の有効な方法であると考えられる。

2．ボール獲得の原因からみると，相手のパスキャッチのミス，防御側のインターセプトからの速攻が攻撃成功率が高かった。

3．より少ない人数で短時間にシュートまでつなげる場合の速攻の攻撃成功率が高かった。

4．全攻撃回数に対する速攻の割合は，勝チーム21.8%，負チーム7.7%であった。

5．得点差の大きなゲームは，勝チームの速攻による攻撃成功率，攻撃に対する速攻の割合ともに高かった。

男子に比べ投力や跳力で劣る女子の試合では，防御者を前においてのロングシュートや不完全な突破の状況でのシュートの成功率は低く，得点も限られてしまい遅攻で大量に得点をあげることは困難である。

速攻では攻防切りかわった瞬間の素早いスタートにより，数的優位の状況が容易に導き出されるため，単純な形で完全な突破でシュートができ，シュート成功率も高い。速攻のチャンスを一つでも多くするためには，攻撃側のミスを待つという消極的な方法だけでなく，防御力の強化を行い積極的な防御により相手のミスを誘発するといったことが必要である。

引用文献

1）ヨアン・クンスト・ゲルマネスク著　中村一夫訳　ハンドボールの技術と戦術　p. 33. ベースボールマガジン社　1981.

2）同上　p. 44.

3）同上　p. 33.

参考文献

1）ヨアン・クンスト・ゲルマネスク著　中村一夫訳　ハンドボールの技術の戦術　ベースボールマガジン社　1981.

2）大西武三他著　実践ハンドボール　p. 120～125. 大修館　1977.

3）大西武三他著　現代スポーツコーチ実践講座7　ハンドボール　p. 185～191. ぎょうせい 1983.